



「中3のテーマはネルソン・マンデラの就任演説でした。同じ原稿を読むのでも、読み方によって伝わるものが全然違うので、正確に伝えること、マンデラが何を考えていたのかを分析して発表しました。」こう語るのは2月に行われた中学レシテーションコンテストで優勝した田代祐和ベドロ君(高一)。学年ごとに課題文が用意され、英語の発音力を競う大会だ。田代君が出る前は会場が少しざわついてはいたのですが、彼が話しはじめると雰囲気が変わり、みんな耳を澄ませて聴き入りだしたんです。印象的な発表でした(英語科・高村教諭。表面的な流暢さだけではなく、話術の研究から始めて深く原稿を読み込むことで聴衆の心をつかんだ。聖学院の英語教育を表す象徴的なエピソードだ。



分と異なるものを排除するのではなくむしろ喜んで教えてもらいたい、刺激ももらいたいという受け入れる文化が聖学院にはあります。帰国生にしみ込んでいる異文化体験は、私たち教師が伝える以上に生徒たちに説得力を持ち、興味深い話がたくさんあります。その経験は他の人には真似のできない貴重なものなんです(清水副校長)

一方で語学力の維持伸張の面での体制も整っている。入学すると英語力ごとに5段階のコースに分かれ、英語に慣れ親しんだ生徒はオールイングリッシュの取り出し授業(SSコース)を受けることができる。またすべての英語授業でネイティブの教員によるコミュニケーションを重視しており、廊下で生徒と談笑する姿は聖学院の日常風景だ。こうした万全の受け入れ体制がそろっているのは慧眼と行動に優れた証拠だ。

新たな異文化を知る機会も多く、オーストラリア語学研修、アメリカ・カナダホームステイの他、タイ研修旅行では30年近く親交のある養育施設や少数民族の村を訪れ、交流や労働を通じて異文化を学ぶ。新潟県糸魚川での農村体験学習では田植えや植林、農家へのホームステイを行い、「食や農業への考え方が根本的に変わりました(田代君)」と感想が出るほどの貴重な体験となっている。

また教員ごとに独自の授業が数々行われているのも聖学院の特徴だ。アメリカに4年在住していた宮本巧君(中2)のクラスでは「ツイッター英会話」という授業を行っている。「お題に沿って文章でクラスの生徒と会話して、言えなかった単語を先生が教えてくれます」。また、「個人的な先生が多い(宮本君)」といい、田代君は社会科の教員と政治に関してよく議論を交わすなど、形式にとられない自由闊達な学びが展開されている。

伸び伸びとそれぞれの個性を才能へと磨き上げていく環境は、男子教育の深い蓄積があるからだ。田代君、宮本君が共に印象深い行事と挙げる軽井沢での新入生合宿では、スポーツやレクリエーションを通じて友情のきっかけを作る。帰国だからという抵抗はないです。だんだんネットワークが広がって行って、今ではどのクラスにも友人がいます(宮本君)。「子供たちが肩肘を張らずに自然体で生活ができる環境が学校の風土の中に溶け込んでおり、これは私たちが誇りに思う一つです(清水副校長)。100年以上、生徒一人ひとりの成長にしっかりと寄り添い、世界へ羽ばたく姿を見届けてきた。聖学院は男子教育の先導役だ。



## 男子教育の先導役

自分を生かし、他者を生かす。目指すのは世界。

糸魚川での農村体験学習

大和郷をはじめ、美しい景観を現在も残す街、駒込。六義園や寺社など歴史が街並みに溶け込む一方で、かつての武家屋敷の広い区画を活かした教育施設も多い。その中で一際目立つのが、神学校を母体とし、時計塔を囲うように建てられた校舎を持つ聖学院だ。「Only One for Others」を理念に掲げ、他者との共生を求め続けてきた、その唯一無二の男子教育は、グローバル化が進む世界に飛び立つためのかけがえのない成長をはぐくんでいる。



タイ研修旅行。施設の設立にもかかわる深い交流の元、長年研鑽を重ねたプログラムは聖学院独自のもの